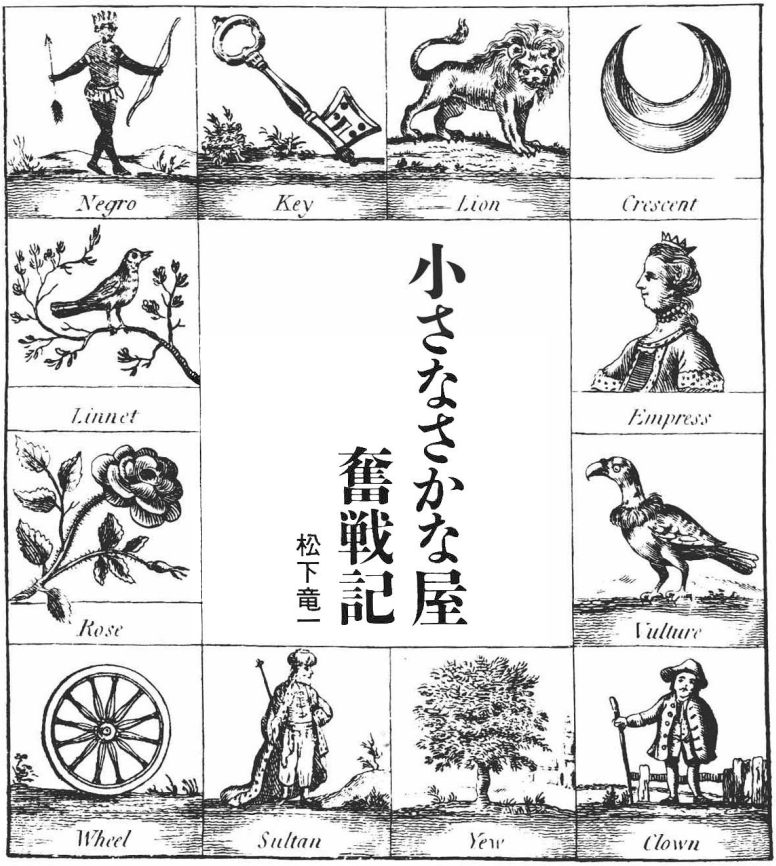
ちくまプリマーブックス33

小さなさかな屋奮戦記

松下竜一

筑摩書房

ちくまプリマーブックス33



小さなさかな屋奮戦記

松下竜一

筑摩書房

913.6／小さなさかな屋奮戦記
223pp／19cm／B6判／中学生から

松下竜一（まつした・りゅういち）
1937年大分県中津市に生まれる。作家。主な著書に『豆腐屋の四季』『砦に拠る』『海を守るたたかい』『ケンとカンともうひとり』『記憶の闇』『狼煙（のろし）を見よ』などがある。

1989年10月25日　第1刷発行

著　者　松下竜一（まつした りゅういち）

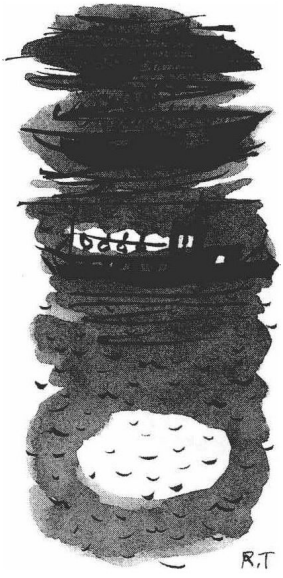
発行者　関根栄郷（せきね ひでさと）

発行所　筑摩書房（ちくま しょぼう）

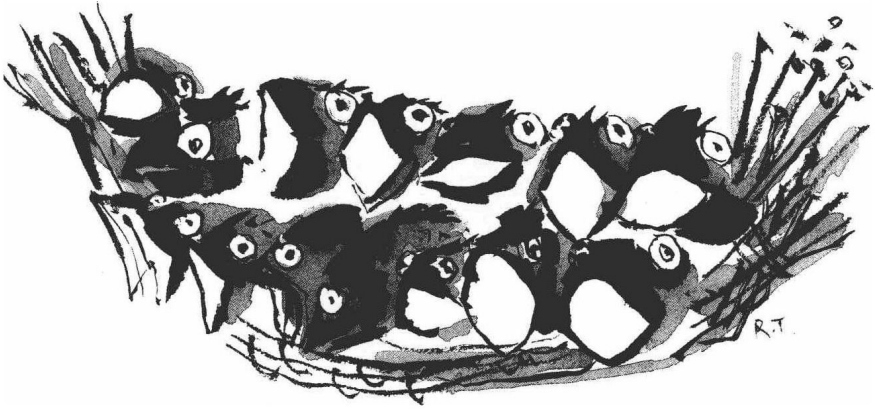
東京都台東区蔵前2-6-4
TEL 03—5687—2680（営業）
5687—2670（編集）
振替　東京6—4123
装幀者　南　伸坊
三松堂印刷　積信堂製本

© 1989 R. Matsushita　Printed in Japan
ISBN 4-480-04133-8 C8336
乱丁，落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

小さなさかな屋奮戦記　もくじ

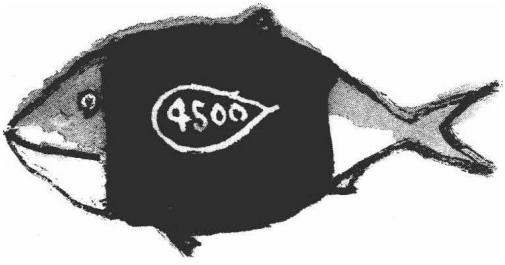


第一話　看板　3
第二話　モジズリ　11
第三話　師匠　19
第四話　耕ちゃんの反抗　27
第五話　詩の朗読　37
第六話　信頼　47
第七話　アラカブ合唱団　57

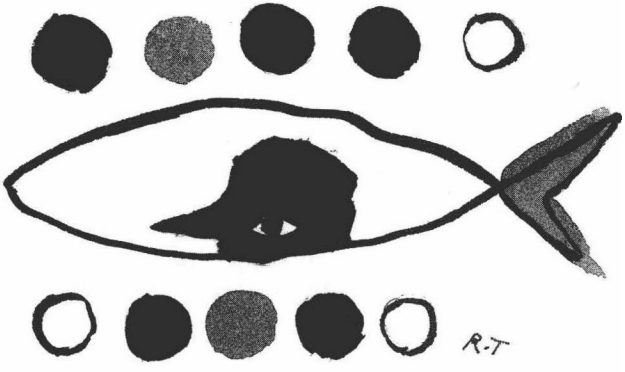


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第八話　諭吉茶屋　67
第九話　歳末の魚市場　75
第十話　間島の秘密　85
第十一話　光代の生き方　93
第十二話　宝の箱　101
第十三話　車椅子のチーちゃん　111
第十四話　「春の本部」　119



第十五話　贈(おく)る詩　129
第十六話　ホタル届く　139
第十七話　エノコログサ　149
第十八話　いいもの　157
第十九話　軒先(のきさき)のカスケどん　165
第二十話　オー　ロマンチック！　173
第二十一話　旧婚(きゅうこん)旅行　181



第二十二話　人の秘密　189
第二十三話　いさかい　197
第二十四話　お地蔵さま　205
第二十五話　タイムカプセル　213
あとがき　221

装画・カット　津田櫓冬

小さなさかな屋奮戦記

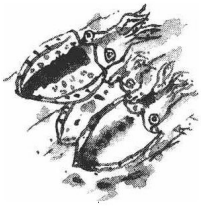
第一話　看板

「やっぱり、この店を舞台に連載を書こうと思うんだ。いや、いや、あんたたち夫婦のことだけを書くんじゃないから。この店に出入りするいろんな人たちに登場してもらうつもりなんだ。小さなさかな屋を舞台にした人間模様が書ければというねらいなんでね……」

間島はそういってから、ちょっと照れくさい顔になった。新しい連載を始めねばならないことは、もう半年も前から梶山夫妻に洩らしていたのだが、何も思いつかぬままきて、結局一番手近な者たちに白羽の矢を立てたのが、われながら気がひけているのだ。

「うちを舞台にするとは、良一さんもいよいよ書くことがないごたるなあ」

まな板にむかったまま、後ろ向きの得さんが笑った。紋甲イカを洗っているので、手もまな板も黒く染まっている。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「おれ、想像力というか、創作力にとぼしいもんなあ」
得さんの背後に突っ立っている間島が、気弱な微笑を浮かべた。創作力とぼしい作家なんて本来存在するはずもない矛盾なのだが、どういうわけか間島は文芸手帳などに作家として登録されているのだから、世の中には例外があるものらしい。
「おとうさん、困ったわねえ」
さかなの陳列ケースを拭いていたノンノン（満智子夫人）が、おどけた口調で顔をあげた。「――良一さんの連載が終わるまで、梶山鮮魚店をつぶすわけにはいかんごとなったなあ」
「そういうことになるなあ。――連載はどのくらいの予定なの？」
振り返った得さんの手に白いイカ舟が握られている。
「いちおう一年の予定だけど……好評だったら延びることもあるらしい」
「ふーん。当分これは店をがんばらんといかんなあ」
得さんの実感のこもったつぶやきのあと、三人は声を立てて笑ってしまった。間島の連載を助けるために、この小さなさかな屋を存続させようというのだから、これはもう本末転倒もいいところだが、いつやめても不思議ではない店の内情を知っている間島には、冗談とばかりは聞こえないものがある。まして一人娘の早苗がこの春京都の短大を

卒業したとあっては、得さんにしてみれば枷が一つはずれたようなもので、これからは夫婦二人で車に乗ってよろず修理屋で流してまわりたいという、以前からのひそかな夢に踏み切りかねないという危惧がある。

間島の連載でほっとしているのは、案外ノンノンなのかもしれない。「わたしは夫婦で流してまわるなんて、とてもそんな真似はできませんからね」と、夫のよろず修理屋願望を牽制してきているのは彼女だったから。

ノンノンが煉炭火鉢のやかんから湯を洗面器にそそぐと、紋甲イカを洗い終えた得さんが黒い手を浸して、フーッと気持ちよさそうな吐息を洩らした。湯に墨がくろぐろとひろがっていく。

四月が近いとはいえ、水仕事にはまだ冷たく、得さんは合間ごとにこうして指を温めねばならない。

周防灘に面した大分県中津市は人口六万六千余の小都市で、これといった特徴もない旧城下町だ。

梶山鮮魚店のある新堀町も間島の住む船場町も城跡に近い町筋で、潮風のにおうこのあたりは市全体の変化からほとんど取り残されている。近くには福沢諭吉の旧居も保存

されているが、この界隈は青年諭吉が歩き廻っていた頃の町筋から、それほど変わってはいないだろうし、これからも大きく変貌するとは思えない。

そんなさびれた町筋の一角で、梶山鮮魚店はこの夏の七月九日には満四周年を迎えることになる。

まったく偶然ながら、間島が十六年前豆腐屋をやめてもの書き稼業に変わったのがやはり七月九日で、この暗合に気づいたとき彼は「梶山得二とは前世からの因縁があるのかもしれない」と、本気で考えこんだものだ。

しかし満智子にいわせれば、これはもう宿命的な腐れ縁だということになるかもしれない。梶山夫妻の後半生の苦難は、もとをたどれば十四年前の間島良一との出会いから始まっているのだから。

当時、反開発運動のリーダーとして立っていた間島と出会ったばかりに、得二もまたこの町を揺るがした巨大火力発電所建設反対運動にのめりこんだのだが、実力阻止行動で逮捕されて長年勤めた製鉄会社をやめさせられるまでには、あっという間のことだった。

夫が獄中にあったとき、満智子はどれほど間島をうらんだかしれない。しかし間島良一と梶山得二の関係は深まりこそすれ薄れることはなかったのだから、男同士の間には

女にはかれぬものがあるのだろう。

釈放されて失業を続けた二年間、谷間の里で行商を続けた六年間、そしてこの小さな店を開いてからの四年近く、得二は一貫して間島のよき相棒で、共に孤立した運動を続けてきているのだ。間島も得二も同じ年の生まれだが、二月生まれの間島が四十九歳になっていても、十月生まれの得二はまだ四十八歳という期間があって（いまがそうなのだが）、得さんは人にむかっては「この人より若いんです」と強調したがる。

いつつぶれるかもわからぬ小さなさかな屋と、いっこうに売れる本を書けない作家とは、共にもう五十歳が眼の前というのに生計の安定もなく、そのくせ友情だの誠実だの他人の痛みだのといったことばかりを正面に掲げて生きようとしているのだから、得さんの女房ノンノンとしては皮肉の一つもいいたくなるのもむりはない。

「ほんとに、あんたたちはいくつになったら大人になるんかしらねえ。——ほら、あんたたちの社会認識ときたら、表の看板ほどに現実とずれてるんやから」

ノンノンがいう現実とずれた看板というのは、外から見ればこの小さな店の左手に立っている。日本中にいったい何千軒のさかな屋があるのか知らないが、まずこんな看板を立てている店は、大分県中津市の梶山鮮魚店くらいなものではあるまいか。立看板に

書かれているのは、日本国憲法第九条「戦争の放棄」の全文なのだ。「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し……」という、あの格調の高い条文である。もう三年近くたって雨ざらしで汚れてしまっているが、いまでもその全文は正確に読みとれる。

これだけは譲れないという決意をこめて得さんが立てた看板だったが、いままでさかなを買いに来る近所の人でこの看板のことを話題にした人は誰もいない。

「あたりまえでしょ。さかなを買いに来た主婦がどうして憲法九条を論じたりしますか。あんたが変わり者と思われただけのことよ。――わたしにはときどき、〈戦争の放棄〉という文句が〈もうけの放棄〉と書いてるみたいに思えることがあるわあ」

かたわらでいくらおおぎょうに嘆息してみせても、得さんの〈もうけを忘れた〉商売方針がいまさら変わりはしないことを、ノンノンもよく承知しているのだ。

「新鮮で間違いのないさかなだけを食べてもらう」ことを厳密に守ろうとする得さんは、決してブリやハマチなどの養殖魚は並べない。薬漬けホルモン漬けの養殖実態を知ってみると、とても客に勧める気にはなれないのだ。高級魚も置かない方針だからほかのさかな屋に較べると魚種も少なく、売り上げの利幅も少ないことになる。それに、残りを翌日にまわすということはしないから、仕入れもどうしても控え目である。

ついこのまえ、税務署の申告に行ったノンノンに「たったこれだけの収入で、どうして暮らせますか」と、担当者は皮肉な眼をむけた。ごまかして利益を小さくしていると疑ったのか、執拗に帳簿を点検された。

「どうして煉炭が経費の中にあるんですか」

「わたしの店は煉炭火鉢でお湯をわかしてるんです。冬の間、手をぬくめる必需品なんです」

そんな小さなことをいいたてながら、ノンノンはいいしれずみじめな気持ちになった。

ようやく認められて帰る途で、花屋の前を通りかかったノンノンは、店の前に並んでいるサクラソウの鉢をつい買ってしまった。

梶山鮮魚店のもう一つの特徴は、小さな店内が花で溢れていることだ。この店を愛する者たちが持ち寄る花々で、ときには飾る場所もないほどになる。陳列ケースの中に並んでいるさかなの種類よりも、周りに飾られている花の種類の方が多い日も、これからの季節では珍しくもないだろう。

小さなさかな屋と書いてきた。

なにしろ車庫を改造しただけの店だから、小さいのは仕方ない。行商に出ていた頃の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c